
七つのしずく

ユウチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つのしずく

【Nコード】

N6942E

【作者名】

ユウチ

【あらすじ】

【7月21日】おそらく学生様方夏休み突入記念。今日から約一ヶ月かけて、『ジャンル…ホラー』の短編作品を、7つ投稿してはいかがでしょうか。少しは恐怖できる作品をご用意できると思いますが、やはりそこは人それぞれなので……、まあとりあえず、一歩踏み込んでみてください。※テレビを消しましょう。照明を消しましょう。

見えナイ物（前書き）

初めに一つ、『七つのしずく』は、夏ホラーには属していません。

――まず第一話。「あなたは見えない存在を信じますか？」もしも身近に見える人がいるとして、信じないあなたはその人のことを異常者だと思えますか？ もしもそれが、親しい友人だったとしたらどうでしょう？

見えナイ物

霊が見える人の気持ち？

そんなのわかるわけないじゃないか。

だって、そうだろう？

人って、誰しも本気で信じ合っているわけじゃないんだから。

『霊の存在を信じますか？』なんてのはバカげた質問だ。

人間の中には、見えないもの、理解できないものは徹底的に信じてないやつもいる。

信じなければそれでいい。そういうやつには、何を言ってもムダなんだから。

——もしも見えない存在が、科学的に証明されれば、信じないほうが非科学的ってことになるよね。

——それって、なんだか悲しいね……。つまらないね……。

でも、『見える人』がいるのも事実だ。

僕の友達にもいるんだよ。見えるやつ。

僕はそいつのことを信じているよ。

そいつの話もさ……。

「――血塗られた女？」

そいつ―― コウスケは、僕によく、自分が見た霊の話をしてくれる。最近は決まって、公園でさ。二人だけで。

他のやつらは、そういう話を聞くと怖がるくせに、コウスケのこ
とまで変な目で見るんだ。

『俺達は怖い話は好きだけど、霊なんて信じない。』なんてな。

「――服をね。真っ赤に染めた女の人なんだけど。あれは殺された人だな。たぶん、強い恨みを持って死んだんだ」

見える人の中には、体験談とか怪談を怖がらせる目的で話さない、
っていう人もけっこういるらしい。なんか、そういう話の中に入っ
てると、自分だけ“感じる”らしいんだ。――よくわかんないけど
……。

でも、コウスケは違う。

「強い恨みを持った霊には気をつけたほうがいいんだ。関係のない
人間に危害を与えることがあるから」

そんなのを見つけたら、コウスケはすぐに逃げるんだって。

でも、霊のほうもコウスケの力に引き寄せられることがあるらし
い。何かと大変なんだと。

僕とコウスケは、幼馴染みたいなもので、小学校に入る前から、
ずっと一緒だった。

なんでも信じあえる親友さ。もう、中学一年生だけだね。

「この前、近くで車の事故があったらしいね。昨日たまたまそこを通るまで気付かなかったけど、男の人が死んでた。運転してた人の霊がいたんだ。でも、あれはいいほうだな。念が弱いから」

不意に死んだ人間の霊は、そうらしい。ようは死ぬ前に、どれほどの念を抱いて死んだか。ということらしい。

かれこれ半年くらい前かな？　ここで、コウスケと話をするようになったのは。

変なやつだよコウスケは……。

「じゃあな。また明日ー」

いつも、五時を過ぎると、コウスケは帰る。

暗くなると、ヤバイらしい。

それなら、僕にこんな話しなくてもいいのに……。

——僕は霊が見える人の気持ちなんてわからない。

でも——

霊の気持ちならよくわかる。

ほんと、変なやつだよ、コウスケは……。

とつくに死んでいる僕にまで、こんな話をするんだから……。

僕は半年前、この公園で死んだ。中学に入る直前だった。独りでブランコをこいでたらさ。足を滑らせて……。ちょうど、今くらいの時間帯で、誰もいなかった。

石の後頭部を思い切りぶつけた僕は、声も出せなくて、助けを呼べなくて……。

苦しんで、苦しんで、死んだ。

僕と話をしてくれるのは、見えるコウスケだけなんだ。

親友だから……。あいつは今も変わらず、話をしてくれる。

——信じているから。

霊になった僕でも、信じてくれる。僕が霊だとわかっていても……。

……でも、このことをコウスケはわかっているのかな？

『血塗られた女』も『この前の車の事故』も……。

全部、僕が殺ったんだってこと。

面白くないからさ。人間なんて。

——でも、僕という存在は、もっと面白くない。

あいつにも、見えない物ってあるんだよね……。ボクの心の中とかさ。

親友なのにな……。

僕は、無事に中学生になったコウスケのことも、許せないんだ……。

見えナイ物（後書き）

こんな感じですよ。

まあ今から見れば、まだまだ夏は長い。これからです。もう少し恐怖度を上げましょうか。

こういう話でもオーケーという方、先へお進みください。

（次話追加…7月26日予定）

ひゃくまんツぶの祈り（前書き）

もう、食事は終わりましたか……？

ひゃくまんツぶの祈り

——その日、あの人は戦艦に乗り込み、戦場へと旅立っていった。
いえ、『旅立った』なんて立派なものではない気がする。

私は、喜んでトシロウさんを見送る彼の母親も、国のために戦うと決心した彼も許せない。
私は送り出されるトシロウさんの姿を、遠くから見ていただけしかできなかった。

——生きて帰られると思っているの？

いくら周りが歓喜の声で満ちていても、私は少しも嬉しくなかなかった。

「すまんアキコ。けど、わしは絶対に生きて帰る。死んだりはせんから……。待っていてくれるか？」

志願前日のトシロウさんとの約束。

生きて帰る。そうしたら今度こそ一緒になろう。

——ともに生きよう。

トシロウさんが出撃して以来、私は神に祈りを捧げ続けた。

毎日毎日。一日もかかず、浜に立って海の神様に祈った。

「あの人が生きて帰ってきますように」

「どうか、あの人をお守りください」

この海の向こうであの人は戦っている。

生きるために今も戦っているのだ。そう信じて。

百万回は祈った気がした。

海は何も語りかけてはくれない。でも私は信じた。

——彼は生きて帰ってくる！

「生きて……」

——トシロウさんは死んだ。

出撃から1ヶ月後のことだった。

彼の乗った戦艦は、敵戦艦の攻撃を受け、乗組員全員が死亡。戦艦とともに海の底へ消えた。

……あっけない死だった。

彼との約束はまるで夢だったかのように……。

——しばらく経った日の夜。私は海へ足を運んだ。
別れを告げるために……。

トシロウさんではなく、この世に。

やはり海は何も語りかけてはくれない。

いく万粒もの水泡が、砂の上ではじけて消えていく。私の祈りも
この泡のように儚くて無意味なものだった。

悲しいのに……。とても悲しいはずなのに……。

それなのに、満月でキラキラと輝く海は、果てしなく綺麗なもの
だった。

「トシロウさん……」

今、あなたの元へ逝きます。

波打ち際にぞうりをそろえて、私はゆっくりと水の中へ——
静かに寄せる波が、着物をぬらしていく。海は私を受け入れよう
としている……。

波の音が、私に話しかけているようだった——

「……アキ、コ……」

私はその声に驚いて海底へ進む足を止めた。

「……トシロウさん？」

……幻聴？

「……ア……キコ」

幻聴ではない！

トシロウさんの声だ！

私は体の半分を沈めたまま、彼を探した。

「トシロウさん？ トシロウさん！」

……彼の声は聞こえなくなった。

たしかにあれば――

トシロウさん……。もしかして、私にお別れを……？
私が悲しんでいると思って……？

そう、彼は生きるために戦っていたんだ。私と生きるために。

それなのに私は……。死のうだなんて馬鹿なことを……。

自分の不甲斐なさに泣き崩れそうになった時――

固い何かが、トンと、私の腕に触れた。そして、弱弱い力で、
何かが着物のそでを掴んだ。

「ひっ……」

視線を下ろした私は震え上がった。

海に漂っているのは、見覚えのある軍服を着た塊。

ソレは波に揺られながら、強烈な腐敗臭を放って浮かんでいた。

そして——ソレは見覚えのある顔を持っていた。

トシロウさん……？

「ア、キ、コ…… タ……」

トシロウさんは、ほとんど崩れた顔の、真っ白な目玉で、私を見つめていた。

「タ、ス…… ケ……」

——祈りは通じていた。

トシロウさんは、たしかに“生きて帰ってきた”。

ひゃくまんツぶの祈り（後書き）

食事は……、終えていましたか？

『グロ注意』とか書くと、オチが読めそうだったので……；
ダメージを受けた方、ゾゾツと忘れてください。

はい。次からは真面目にやります……。

（次話追加…7月30日予定）

視線ノ先（前書き）

誰かの視線を感じることはありませんか？

視線ノ先

「フランス観光ツアーにご招待！」

友人の小野が俺に差し出した招待状。

『フランスにペアでご招待。7日間の観光ツアー』と印刷されている。

「雑誌に応募したら当選したんだ。一緒に行かないか？」

会社が夏の長期休暇に入り、暇だった俺にとっては最高の気分転換だ。

迷うことなくその話にのった。

ツアー当日――

俺と小野は、他のツアーメンバー8人と、まとまってバスに乗り込み、空港へ。

現地へ向かう飛行機の中、俺たちはそのツアーに期待を膨らませていた。

楽しい旅行になるはずだ、と……。

フランスに到着後、ツアーは本格的にスタート。

旅行会社のスタッフの引率で、バスなどを利用し、フランスの世界遺産や、観光名所を7日間で巡る。

自由時間の間、小野が持ってきていたカメラで、さまざまな建物や広場、花畑をバックにして、他の観光客に写真を撮ってもらう。

だが、小野の表情が時々強張り、突然後ろを振り返ったり――妙な行動を見せていた。

「どうしたんだ？」と訊いても、「なんでもない」と返ってくる。彼の様子が気になったものの、せっかくの楽しいツアーだからと、その思いをかき消した。

フランスの街、土産物、食事。

7日間ツアーは、想像以上に楽しいものであった。

――しかし、日本にもどって数日後、異変は起こった。

休暇も終わり、仕事をしているときだった。

小野から会社で電話がかかってきたのだ。

「どうした小野？」

呼びかけるが、しばらく返事がなかった。

「……見てる……、女が俺たちを見てるんだ……」

やっと聞こえた小野の小さな声は、震えて、かすれていた。

「女？ 何のことだ？」

「見てる……、ずっと……、気をつける……」

電話は切れた。

……女が見ている？

何のことだかさっぱりわからないが、ただ事ではない様子だった。再度電話をするが、通じない。

——後で小野の家に行ってみよう。

焦る気持ちを落ち着かせながら、仕事に集中した。

仕事が終わり、すぐに会社を出た俺は、小野の住むアパートへ車を走らせた。

小野は、ボロいアパートに一人で暮らしている。時間は午後7時を過ぎ、この時間には小野は家にいるはずなのだが……。

インターホンを押しても誰も出てこない。

ノブを回すと、鍵がかかっていないことに気付いた。

「小野ー、いるのか？ 入るぞ」

それだけ言い、俺は薄暗い室内に入って、ガチャンとドアを閉めた。

小野がフランスにも履いて行った靴は、そろえて置いてある。俺も自分の靴を脱いでそろえ、台所から畳の居間に入る。

「小野、どうした——」

——息が詰まった。

窓から射し込む夕日に照らされ、首を吊った小野のシルエットが浮かんでいた。

「小野！ 小野！」

俺はすでに冷たくなっていた友人を降ろし、震える手で救急車を呼んだ。

脈がないことは、調べなくてもわかる。首の骨が折れて生きていられるわけがない。

——なぜ死ぬんだ！？ くそっ！

『女が見ている。気をつけろ』

小野が最後に残した言葉がよみがえった。

ふと、ちゃぶ台を見ると、写真の束が置かれていた。ツアーで撮った写真だ。現像したと言っていたが、見せてもらっていなかった。

俺は無意識にそれを手に取っていた。

一枚一枚、写真を見る。生きている小野が写った写真を。

街で写した写真。古城で写した写真。ホテル前の写真……。

「……なんだこりゃ……」

俺は固まった。

そのすべてに——どの写真にも——青いワンピースを着た女が写っていた。

黒髪の日本女性。ツアーメンバーの中にこんな女はいなかった。

その女は明らかに俺たちを見ている。
人ごみの中、木の陰、花畑の真ん中……。遠くから、近くから……。

女が見ている……。

ツアー中、小野の様子がおかしかったのは、このせいかな。

写真の横に、新聞記事の切り抜きがあった。

『フランスツアー旅行中に女性が事故死』

死亡した女性の白黒写真。俺たちの写真に写っている女と、同じ顔だ。

そして、俺たちの時と同じ旅行会社の名前が。

「まさか……」

この女は小野を見ていた——とり憑いていたというのか？
この女のせいで自殺を……？

いや、でもなんで——

ふと見ると、小野の足元にもう一枚、写真が落ちていた——

「……は？」

帰りの空港で撮った、俺と小野のゆいいつのアップ写真。

その写真にも女が——

俺の肩から蒼白い顔を覗かせ……

白い眼で……、俺を……、見ている。

「……………」

——急に、誰かの視線を感じた気がした。

……救急車は、まだ来ない……。

視線ノ先（後書き）

——あなたの後ろにいるのは、
だれ……？

（次話追加…8月4日予定）

才別れを（前書き）

自分が死んでしまったとき、あなたはどうしますか？

オ別れを

『——あれ？　ここはどこ？』

川が流れる音が聞こえる。

僕はゆっくりと目を開けた。

——僕だ。

川に浮かんで、流されていく僕がいる。

『どうして？　え？　なんで？』

——僕……　死んだの？

僕は流されていく“僕”を見つめながら、上へ引っ張られるように昇天していく。

『いやだ、待って……！　逝きたくない！　待って……！』

——母さん！　——父さん！

助けて——

『——！！』

……………あれ？

いつの間にか地面に立っていた。

たくさんの人たちが行き交うこの場所は……、近所の商店街だ。

あれは何だったの？ 僕は生きてるの？

商店街の雑踏の中、人々は僕の体をすり抜けていく。

……やっぱり、死んでるの……？

『——おい、お前』

耳元で男の声がした。

驚いて振り向くと、色黒の大男がすぐ後ろに立っていた。
目つきの悪い、殺人者のような顔の男。

『お前、なぜ残っている？』

……は？ 何言ってるの？

この人…… 僕が見えるの？

そこで気がついた。そこに立つ大男の体もまた、人々がすり抜ける。
この人も、幽霊……。

『いくつだ？』

男が、上から僕をにらみつけるようにして訊く。

『じゅ…… 十三歳……』

僕が答えると、

『若いなあ、若すぎる……』

——雑踏の中、その男の声だけが聞こえていた。

『いいか。すぐに“ムコウ”へ逝け。お前はもう死んだのだ』

『待ってよ！　なんで……、あんただって死んでるじゃないか！』

『俺は、目的を果たすために“こっち”に残っている。お前とは違う』

『僕だって同じさ！　母さんや父さんにお別れを言うまでは逝けない！』

力強く言ったつもりだった。でも、まるで射殺すように僕を見下ろす大男の前に、動じてしまったのは僕のほうだった。

『俺はある男を殺すために残っている。お前みたいな“ぬるい”理由でこっちに残っていると後悔するぞ』

『人を殺すよりはマシだろ！？』

恐怖を見せないように、ぐっと歯を食いしばって男の目をにらんだ。

——しばらく僕と大男のにらみ合いは続いた。

そしてとうとう男は、

『まあいい、俺の忠告はここまでだ。だが忘れるな、俺もお前も普通の人間には見えない存在だということを』

それだけ言うと、僕をすり抜けて行った。振り返ったが、男の姿はなく、商店街のざわめきもどっていた。

誰も見てくれなくてもいい。僕の声が届かなくてもいい。

でもせめて母さんや父さんに言いたいんだ。「ありがとう」「ごめん」って……。

——僕は自宅へと足を進めた。

家の前で、近所のおばさんが僕の話をしていた。

「息子さんが川で溺れて、病院へ運ばれたらしい」と。

溺れた……、いや僕はもう、死んでいるんだ……。

母さんたちは病院へ行っている。僕が助かると信じている……。

ごめん……。

僕は家の前で母さんたちが帰ってくるのを待った。

夜—— 深夜になって、母さんと父さんがタクシーで帰ってきた。

泣きじゃくる母さんは、親戚のおじさんに支えられて降りてきた。

『母さん！』

母さんに手を伸ばそうとしたとき、また僕を上から何かが引つ張った。

『待って！　もう少しなんだ！　あと少しだけだから！！』

僕は弾かれるように、家の中へ飛ばされた。――壁をすり抜けて、二階の母さんと父さんの部屋に。

父さんは玄関で、おじさんにお礼を言っている。涙はとっくに枯れているのだろう。その声に力はない。

おじさんはそのままタクシーで帰っていった。僕は母さんたちが上がってくるのを待った。

すぐに重い足取りで階段を上る音が聞こえ、母さんと父さんが、小声で話をしながら部屋に入ってきた。

ごめんね……。母さん……。父さん……。

霊は涙を流せない。悲しい気持ちは外に出ることなく、僕の中に溜まっていく。

父さんが暗い部屋の電気をつけた。

二人の泣き顔なんて見たくなかった。余計に悲しくなるから。

『母さん、父さ――』

……違った。

泣いてなどいなかった。

母さんと父さんの顔は—— 冷酷な人間のように無表情で——
いや、微かな笑み。

「で？ あの子の保険金はいつももらえるの？」

「すぐに入る。それよりも、絶対に怪しい素振りを見せるなよ。誰かに疑われでもしたら——」

「わかってるわよ！ 無計画にあの子を殺したわけじゃないんだから」

『……え……？』

僕は固まった。

なんだって？ 殺した……、殺した……？

——僕を殺した！？

そんな……、嘘だ……。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ……！！

『嘘だあ……！！』

『——だから、早く逝っちゃったほうがよかったんだ』

母さんと父さんの声は聞こえなくなっていた。

あの大男が、また僕の後ろに立って、耳元でささやいた。

『これがこいつらの本性だ。真実なんて知らずに逝っちまったほうが、ずっとよかったろ?』

『なんで……、父さん、母さん……』

僕は殺された……。母さんに川に突き落とされた……。僕は母さんと父さんに殺された……。

愛していたのは……。僕だけだった……。

男がまたささやく。どこか嬉しさのようなものが滲んでいるようだった。

『人の殺し方、教えてやろうか?』

才別れを（後書き）

誰にも、人の心の中はわからない。

（次話追加…8月9日予定）

忌まワしき生（前書き）

死にたいのに死ねない。

……あなたなら、どうしますか？

忌まワしき生

「大丈夫か!？　くそつ、救急車は呼んだのか!」

「すぐに来るって……!　ああっ、どうしましょう!？」

……この日、僕は死んだ。

学校が苦しくて、社会が苦しくて、人生が嫌で……。

橋から飛び降りて、自殺した――　はずだった。

――なのに……。

「シンジ!　シンジ!　よかった……」

そこは病院。個室のベッドの上。

体が動かなくて、全身にたしかかな痛みを感じる。全身のいたるところに包帯が巻かれているのがわかる。

「シンジ……、どうして自殺なんて……」

――ああそうか。僕は生きていたんだ。

……生きていた。

僕にとっては悲しいことなのに、ベッドの横で泣いてる母さんや父さんは嬉しそうだ。

「シンジ君、意識がもどったそうですね」

眼だけを横に動かすと、男の人と女の人がドアを開けて入ってきていた。

「シンジ、この二人があなたを助けてくれたのよ」

「シンジ君、びっくりしたよ。僕らの目の前で飛び下りるんだから」
「よかったわね。シンジ君」

——忘れもしないこの声だ。

ずっと遠くから聞こえていた、この忌まわしい声。

こいつらのせいで、僕は死ねなかったんだ。

体が自由に動けば、殴り飛ばしていただろう。かわりに、僕はそいつらをにらみ続けた。

助けやがって……、よくも助けやがってバカヤロウ！！

「シンジ君。まだ若いんだから、もう自殺なんてバカなこと考えちゃダメよ」

ああ……、このクソブタどもをぶっ殺してやりたい。

無責任に人を助けようなんて、バカなのはこいつらだ！

死にたいやつの気持ちもわからないくせに、正義ぶっているバカだ！！

僕の将来を何一つ保証してもくれないくせに、無責任すぎるじゃないか！！！！

——クソツタレ……！！

その後、回復も早かったため、僕は1週間で退院した。

『自殺なんてバカなこと』

その言葉は僕のプライドを踏みにじった。

僕がしたことはバカなことなんかじゃない……！

それ以来、母さんと父さんは、僕の行動の一つ一つに気を使い始めた。

少し外出するだけでも「どこに行くの？」といちいち訊いてくる。

この世界はもっと過ごし辛くなった。

僕は何度も自殺をはかった。

しかしその度に、処置が早かった、打ち所がよかったなどと、いらない奇跡が起こり、生き延びてしまう。

医者も呆れ果てるほど、僕は病院に入り浸りになった。

強制的にカウンセリングを受けさせられ、四六時中部屋に閉じ込められ、監視された。

生き地獄だ……。もう、本当に死なせてほしい……。

ペンで喉を刺し、自分の手で自分の首を絞め、舌を嚙んだ。

苦痛だけが襲いかかるだけで、死ぬことはない。

どうしても死ねない地獄。この地獄から逃れるために――。

死ぬことだけが僕のクソ人生の目標となっていた。

何度死に、生きただろうか。

これで最後にしてやる。

ようやく周りの監視が解かれ、自由になった僕は、夜を待ってビルの屋上へ上った。

地上のアスファルトまで、30メートル。

邪魔者はいない。

僕はためらうことなく、フェンスを乗り越え、死の世界へ飛び立った。

今度こそ、本当に自由になるんだ。

「――あれ……？」

ゆっくりと落下しながら、その時になって、はじめて激しい後悔が心を打った。

僕はなぜ死にたかったんだ？ 何に苦しんでいたんだ？

“死ぬなんてバカなこと”

僕はバカだったのか……？

そうだ、死ぬ気になれたのなら、どんなことがあっても生きていけるはずだろ？

何度も死んだのなら、もう生きることなんて怖くないじゃないか。

なぜ今まで気付かなかったんだ？

……まあ、いいや。

次からそうすればいいんだ。

今度は、死のうなんてバカなことを考えずに、真面目に生きよう。

僕は生きることができるんだ。

生きよう！

——グシャーンッ！！！！

忌まワしき生（後書き）

あなたが将来、もしも死を決心したなら…、橋の欄干に足をかけたとき、屋上の手すりを越えたとき、ロープの輪に首をはめたとき…、三秒でもとどまってみてください。

三秒前に死んだ自分が見えることでしょう。

（次話追加… 8月14日予定）

守りの人形（前書き）

更新遅れて申し訳ない。

守りの人形

わたしの家、応接間の隅の小テーブルに『助蔵人形』という人形が置いてある。

いつからかわからないが、我が家の家宝として大切にされている人形だ。

『助蔵人形』は、男の子を模した可愛らしい御所人形で、江戸末期の人形師「助蔵」によって作られたというのが名前の由来だ。

言い伝えによれば、この人形は助蔵の最後の作品らしい。

助蔵は腕の良い人形師だったが、引きこもりで、生涯の半分を作業場から一度も出ることなく人形作りに費やしたという。

助蔵は本当に、人形が――人形作りが好きだったのだな。とわたしは思った。

その人形の笑顔には、男のわたしでも、いつも癒されていた。

しかし、家宝にしては雑な扱いで、ガラスケースに収められるでもなく、いつもそのままの状態で応接間に飾られていた。

昔、祖母に言われたことがある。

「へたに動かさず、絶対にそのままにしておきなさい。大切な人形だから、蔵にしまったり、押入れや戸棚に入れたりしてはいけない」

「その場から動かしてはいけない」と。

守り神みたいなものだろう。

そのときはそう思った。

わたしが生まれて40年。助蔵人形はずっと、応接間の隅の、その場所から動かされてはいない。

不思議なのは、百数十年経っているにも関わらず、色あせや、虫食いなどが無い。代々こまめに手入れされていたからかもしれないが……。

——祖母が亡くなって20年。

今では人形の手入れをする人はいない。

だが、「しまっではいけない」という祖母との約束だけはずっと守っていた。その言葉は当時幼かったわたしの恐怖心に刻み込まれ、消えることはなかった。

きっと助蔵人形は、代々の家族を守り続けてきたのだろう。

笑顔の人形を見るたびにそう思っていた。

その日が来るまでは……。

ある日、わたしは猫を飼うことにした。

父は数年前に没し、それ以来、母は老人ホームに。今だ独身のわたしは、家に独りになった。なので寂しさを紛わすため、友人から子猫を一匹譲り受けたのだ。

子猫は飼い始めて数日経ったところから、好奇心で家中のいろいろな物をいじりまわすようになった。

だからわたしは、家宝の助蔵人形に被害が及ばないように、ガラスケースを買ってきて人形をその中に保管した。

祖母の言いつけを破ることにともなるが、可愛い顔に傷が付けられるよりはマシだ。人形のために……。

そう思った。

だが――

翌日深夜。

わたしは妙な物音で目を覚ました。

ガン！ ガン！ ガン！

――何かを叩く音。

わたしは懷中電灯を持って家の中を見回った。

――音は応接間から聞こえていた。

そのとき、ふと思い出したのは、助蔵人形を保管したガラスケース。

猫が部屋に忍び込み、悪戯をしているに違いない。

ゆっくりとドアを開け、暗闇に耳を向けた。

音はガラスケースのほうから絶えず聞こえる。

やはり猫の仕業だ。

暗闇に明かりを向けようとしたその時、わたしの足にフサフサし

たものが触れた。

「にゃー」

——猫だ。

猫がわたしの足元にすり寄ってきた。

しかし——

ガン！ ガン！ ガン！

音は聞こえてくる。

丸い明かりを移動させ、床から部屋の隅——そこに置かれた小テーブル——その上のガラスケースへ——。

わたしは自分の目を疑った。

その中では……、あの笑顔だった助蔵人形が、憤怒の表情でケースを壊さん勢いで叩いていた。

青白い顔に血走った眼、むき出しの歯……。

『ここから出せ！！！！』

そう叫んでいるようだった。

なぜ助蔵人形をしまったりしてはいけないのか。

それは、この人形が呪われていたせいなのだと、その瞬間確信した。

人形には作り手の思いがこもるといふ。

人形師の助蔵は……、

本当に自らの意思で人形を作っていたのだろうか？

朝にはもう、人形は静かになり、もとの笑顔の状態にもどっていた。

わたしはすぐに人形をガラスケースから取り出し、小テーブルに置いた。

祖母もこの人形の秘密を知っていたのだろう。

それなのに代々家宝として守り続け、手放さなかったのは――？

そう考えると恐ろしくなる。

今では応接間は閉め切り、誰も中に入れないようにしている。

それは人形を閉じ込めたことになるのだが、人形はそれには気付いていないようだ。

少なくとも、現在は……。

守りの人形（後書き）

人形は大切に、ね？

（次話追加…8月21日くらい）

エイエンニ(前書き)

さあて、最後のお話です。

今回のお話はけっこう長いです。一風変わったホラー(?)ですが、少しでも楽しんでいただければ…、まあ、最後ですし…;

エイエンニ

パラレルワールド——この世界と並行して存在する別の世界。無数に別れた現実世界の分かれ道。無数にある可能性の世界……。

もしも、その世界に行くことができるとしたら？

この世界に、別世界への案内人がいるとしたら……。

8月21日。

この日、私の目覚めは最悪だった。

悪夢を見たわけではない。——その逆で、楽しい夢を見たから。夏休みが始まったころの楽しい思い出を……。

「はぁ……、楽しい夢が悪夢に思えてくるわ……」

時計を見ると朝の7時を少し回った時間。

早く起きすぎたけど、二度寝をする気分ではない。しかたなく、のそのそと部屋を出て階段を下りた。

キッチンでは、母さんが皿洗いをしていて、出勤前の父さんがテーブルで新聞を読んでいた。久しぶりに見る光景だ。

「あら？ 今日はやけに早いね、サオリ。登校日？」

「ううん、早く起きちゃって……」

「あーそう、それはいいけど……、あなたの分の朝食、用意してないわよ？」

「いいの、食べる気しないから」
すると父さんが新聞から顔を上げた。

「いくら寝坊しても平気なんだから、サオリがうらやましいよ。夏休みはいつまでだ？」

「……うるさいわねえ」

私は怒りを込めたため息を吐くと、キッチンから出て洗面所へ向かった。

「（もう最悪！！！）」

ただでさえ“嫌な夢”を見て憂鬱なのに！！ 父親ってほんと、デリカシーがないわ！！

まだ宿題も半分以上残っている。作文も書かなくちゃいけない。夢の中にずっといたほうがマシだったかも……。

乱暴に顔を洗い、タオルに顔をうずめてもう一度大きくため息を吐いた。

昼前までカラ同然の時間を過ごしてから、友達のユリとエミに誘われていたショッピングに出かける。

待ち合わせ場所で二人と合流し、昼食をとるためにファミレスへ。

「――うちもしょっちゅう聞いてくるんだ。夏休みはいつまでなんだ？ 宿題は終わったのか？ って、マジうざいよね！」

注文したメニューを待つ間、暇つぶしにこぼした私の愚痴に、ユリも同感してくれた。

「来年は進学か就職かで忙しいし。高校生として、まともに過ごせる最後の夏休みなのに、呆気なく終わっちゃうわね」

「サオリこそ終わる終わるって言わないでよく。私まだ全然、宿題終わってないんだから」

「私も同じく……。なんなら一緒にやる？ 去年みたく三人で。エミはどうなの？」

向かいを見るとエミは、ぼーっと空になったお冷のコップを見つめていた。

「どうしたの、エミ？」

「……なんか、待ち合わせ場所に行く途中、変なおじさんに声かけられたのよね」

私とユリは顔を見合わせた。

「……昼間から変質者？」

すると、エミは首をかしげて、

「変質者っていうか、タキシードにシルクハット姿でステッキ持ってた——」

「何、今どきその紳士!？」

「——背中に天使の羽を付けてた」

「うわっ、絶対変質者だ!」

想像して思わず爆笑する。

ユリが興味津々に身を乗り出す。

「それでそれで？ 何て声かけられたの？」

「うーん、私すぐに逃げちゃったから、よくわかんないけど……。パラレルワールドにご招待とか何とか……」

「パラレルワールド？」

ユリと声がそろろう。

パラレルワールド—— 映画とかで何度か聞いたことがあるけど、こういうものなのかはよくわからない。

「やっぱりただの変質者だわ。忘れなよ、エミ」

ユリは笑っていたが、私にはその変質者のことがどうも気になっ

た。

——いや、『パラレルワールド』……。気になったのはそのフレーズかもしれない。

その後、雑談を交えながらの長い食事を終え、ショッピングセンターへ繰り出すぞ！ と勇んで席を立とうとしたときだった。指をコップに引っ掛けてしまい、残っていたお冷が思いっきり私の服とジーパンを濡らしてしまった。

「……最悪」

気持ち沈んでいくのを感じた。

「——まあまあ、たまにはあんな失敗もあるって！ 気にするな！」
他人事のように笑うユリと、哀れみの目を向けてくるエミ。

昼食代は、ユリが同情しておごってくれたが、少しのなぐさめにはかならない。ジーパンが濡れると足が重いし気持ち悪い。その上恥ずかしい。おまけにひどくびしょびしょで、なかなか乾きそうにない。

それだけならまだマシだったけど、更に追い討ちをかけたのが、

「あつ、サオリ、止まって！」

突然、エミが叫んだ。

「え、何？」と聞くのと同時に、靴の裏でやわらかい何かが潰れた。

「……まさか……」

ゆっくりと足を上げる……。

「最悪ううう！！」

——今日は厄日だ。

そう思うと楽しみにしていたショッピングも、楽しさが半減した。けつきよく買い物を終え、二人と別れるまで沈んだ気分のままだった。

「ああああっ！」と頭をかきむしりながら独り路地を歩いていると、ずっと前の電柱にもたれかかっているタキシードとシルクハットが目に入った。

とっさに立ち止まり、遠くからその人物を凝視する。
あの服装、ステッキ、そして……、背中の天使の羽……。

——間違いなく例の変質者だ。

「ヤバ……、マジで居た」

遭遇しないよう、そつと後じさりする。

そのとき、その変質者が私のほうを向いた——

「うえ!?!」

まるで瞬間移動のように、変質者が一瞬で私の目の前まで接近した。

20メートルは距離があったはず。考えるよりも先に、私の頭の中に警告音が鳴り響く。

——人間ではない。直感がそう教えた。

逃げたい。でもその人物が冷たい無表情の顔で、私を見下ろしていて、なぜか体が動かない。

「……てます?」

「……は、はい?」

「してます？ 後悔」

「……は？」

無表情が瞬間で満面の笑みに変わった。

そいつ—— その男は一步後ろへ跳ぶと、踊るようにステッキを振り回して喋り出した。

「パラレルワールド—— 今、貴方達が住む世界は、無数にある分かれ道の中の一つです。この瞬間でも時間は流れ、また無数の分かれ道—— 無数の世界が造られていきます。もしかすると別の世界で、貴方は結婚し、子供を持っているかもしれない。もしくはとっくに亡くなっているかもしれない。ですがきっと、その中には今の貴方よりもずっと幸せな貴方があるはず。もちろん、別の世界を見ることなどできません。しかし貴方が望むのなら、ご案内しましょう、このわたくしが」

男は優雅に一礼すると、また目の前に迫った。

「ば、ばられるわあるど？」

「そう、パラレルワールドのご案内です。どうですか？ 一度試してみませんか？ いえいえ、やましい心はございません。わたくしはあなたのお役に立ちたいだけなのです」

「ぐ、具体的にどんな……？」

「そうですねえ、少し前の分かれ道まで、もどしてさしあげましょう。無数に存在する分かれ道の中から、一つ大きなものを選んでですねえ—— 行ってみればわかりますよ、いかがなさいます？」

つまり何？ 時間をもどすってこと？ さっぱり呑み込めない。

「いかなさいますう？」

男がもう一度聞いてくる。

「……そ、それじゃ、少しだけ——」

「かしこまりました」

今度は数歩分後ろへ跳び、男は踊り出す。

前へステップ、後ろへステップ。ステッキ回して一回転。

「それでは、行ってらっしゃいませ」

視界が真っ白に染まった。

「……………はっ？」

——にぎやかな話し声。

気付くとそこはファミレスのボックス席。となりにユリ、向かいにエミが座っている。

「……………」

「さあて、昼食も終えたし、ショッピングへ繰り出しますか」

「……………」

「あれ？ どうしたのサオリ？ 胃の調子が悪いとか？」

「え、は？ ……ははは、な、なんでもないよ」

服は濡れていない。コップも倒れていない。何もかもがあのときにもどっていた。

——夢、見てたのかな？

そう思うとそんな気がしてきた。

コップを倒さないよう、手元に注意して立ち上がり、会計を済ませて店を出た。

「心は晴れ晴れ！　まるでこの空のように」

「ご機嫌だね、サオリ。何かいいことあった？」

「べっつにー？　あ、ところでエミ、さっき話してた変質者ってさー」

「え、変質者？　……何のこと？」

「だから、タキシードとシルクハットの……」

エミは困ったような顔で私を見ていた。

あれ？　もしかしてそんな話してないの？　そういうこと？　頭がこんがらがる。

「あっ、サオリ、止まっ——」

「はあっ！」

私は大げさにジャンプして、すぐ足元に落ちていた“ソレ”をかわした。

「おお」

二人がパチパチと拍手する。

「すごい反射神経だねえ……」

「天使のおじさまのおかげよ」

無数にある道の二つ目を、私は体験している。

うさんくさい天使だったが、おかげで今度は前の分まで思い切りショッピングを楽しむことができた。

「どうでしたか？　もう後悔はありませんね？」

帰り道、あの路地であの男が待っていた。

「おかげで最高だったわ。パラレルワールドを体験するっていうのは、つまりタイムリープするってことね？」

「……簡単に言えばそういうことですかね。どうです？ もう一度体験してみませんか？」

「いいの？」

「ええ、どこでもご希望の時間へ」

と言われても簡単には思いつかない。

大きな後悔はとくにないし、やり直したいことと言われてもすぐには――

――思いついた。

「それじゃあ、ひと月前―― 7月21日へもどりたい」

そうすればまた、のんびり生活を満喫できる。

宿題も早めに終わらせて、楽しいこといっぱいして……。最高の夏休みを。

「いいでしょう。それがお望みならば」

男は前回と同じように数歩分後ろへ跳び、ステッキを回した。

「踊りは省略。めんどうなので」

ビッ！とステッキを私に向ける。

「貴方とわたくし、もう二度と会うことはないでしょう。……それでは、いってらっしゃいませ」

ほんの一瞬、男がニヤリと笑ったように見えた。

けど、もう何も見えない。視界は真っ白になり、やがて暗くなった。

——ピピッ！　ピピッ！

耳障りなアラーム音で私は目を覚ました。

のろりと起きてスイッチを止める。いつものクセで目覚ましをオンにしていたのだ。

……いつものクセ？

ああそうか、今日は7月21日。夏休み初日だ。ケータイを確認するが、間違いない。

何だか長い夢から覚めた気分ね……。でも、また夏休みはやってきた。

足取り軽く階段を下りると、いつものように母さんは皿洗い。父さんはテーブルで新聞を読んでいた。

「あら、早いね。夏休み入ったんでしょ？」

「うん。アラームのスイッチ入れちゃっててね」

「そう、でも早起きはいいことだわ」

父さんが新聞から顔を上げた。

「のんびりでキていいなあ、サオリは。夏休み、いつまであるんだ？」

初日からでもそれを聞くか、この父親は。

「いつまでだっていいでしょ？　あ、それより母さん、今日お昼は外ですませるから」

「またユリちゃん達と才出かケ？　夏休み初日カラ？」

「うん、そう、だけど……」

——あれ？ 何か違う。

過去だけれど、たしかにここは私の家で、目の前にいるのは私の母さんと父さん……、で……？

「ほんと、仲がいイノねアナタ達は。ウフフフ」

「気をつけるンだゾ。うかれすぎテ事故に遭わないようニナ。アハハハ」

——違う。

「顔、洗ッテきなサイ。ご飯、食べるンデシヨ？」

——違う！

「さて、父さんハそろそろ会社ニ行クとスルカナ」

——違う！！

ピリリリ。ピリリリ。

ケータイが鳴った……。ユリから……。

『もしもし、サオリ？ 今日、昼からだけどさあ』

「ユリ、助けて、違うの……」

『え？ 何？ 違うって、ナニガ？ ドコガ、どういうフウニ、違う、ノ？』

「ユリ……」

『元気ナイわねエ、夏休みが始マツタツテイウノニ。楽シイ楽シイ
楽シイ夏休ミガ』

——絶対に違う!!!

『楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ楽シイ……』

「やめてええ!!!!」

私はケータイを床に叩きつけた。

母さんと父さんが、そんな私を無表情で見つめている。

何なの!? 何なのいったい!!!?

……ココハ、ドコナノ?

「パラレルワールド—— 貴方達が住む世界は、無数にある分かれ道の中の一つです。では他の分かれ道、無数に存在する別の世界はどうなっているのでしょうか? ……いえいえ、そんなもの存在しません。貴方達の住むべき世界は、たった一つだけです。パラレルワールドがあるとすれば—— そこは人間の住む場所ではないのですよ。ふふふふ……。ナニが住んでいると思います?」

「——ご案内してさしあげますよ。貴方がそれをお望みでしたら」

エイエンニ（後書き）

終わったあ。もう気力はマイナス値です。

微妙な心境です。ラストの話がこれでよかったのか；

いえ、これでよかったのです！

【お詫び】

21日に更新を予定していたくせに、余裕かましていた僕は、当日の夜中になるまで一行も書こうとしていませんでした。それどころか、ストーリー構成も漠然としていて、徹夜でやっと半分書き上げた次第です；

計画性がなさすぎでした。すいません；

『七つのしずく』は完結ですが、連載中の小説のほうも、ごひいきにしていただければ、とても嬉しいです。

それでは、ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6942e/>

七つのしずく

2010年10月16日00時34分発行